
僕らの手の上に

佐智

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕らの手の上に

【Nコード】

N7516T

【作者名】

佐智

【あらすじ】

異常なほどにお互いのことしか考えない双子の日常話。

だぁーいすき。

愛情なんかじゃ、足りない。

もっともっと強い繋がりで。

血で繋がっている僕らを誰も邪魔はできないよ。

くすくすくす……。

そんな僕らを邪魔した愚者はだあれ？

さあ、僕らと踊ろうか。

僕はいつもどおりに過ごしていた。

授業中は静かに教室でぼーっとしていた。

つまらない。

そう小さくつぶやいた瞬間、光りだす携帯。メールだ。

送り主なんて確認するまでもない。僕の携帯にメールや電話をしてくるのはたった一人だ。

内容を確認したら、思わず笑ってしまった。

『つままないから、次一緒にサボる』

時計を確認すると、授業終了まであと五分。たまたま授業が早く終わったのか、担当の教師はいなくなっていた。

僕はメールの相手がでかしそうなことを予想して、メールを打った。

すると、拗ねてしまったのか、すぐに返ってくるはずの返信がなかった。

可愛いなあ。

そうにやけながら、僕は歩いていた。

ただひたすら、彼の教室を目指して。

「迎えに来たよ、祐樹」

君は驚いて僕に駆け寄ってきた。

「会いたくないって思ってるのかと思った……」

「そんなわけないじゃん」

その言葉に君はだらしなく笑う。

僕は『最後まで授業はうけてね』とメールを送ったのだ。祐樹は先生の有無に関わらず、すぐ僕に会いたいが為に授業をサポートして僕を迎えに来るから。

祐樹は僕を迎えに来るとは思わず、ただただすぐに会えない事実拗ねてしまった。僕が自分と同じ気持ちではないのかと。

僕だって、迎えに行きたかったのだ。臆病者の僕は、先生がいる前で堂々とサボることができなかっただけで。

「優季」

「ん？」

「早く行こう」

どこかイライラしている祐樹を感じて、僕はようやく周りに目を向けた。

好奇の目。

それがいたるところにあった。

クラスの人気者の祐樹に双子がいるなんて思いもしなかったんだろ。僕はクラスで友達を作らず、空気のように過ごしているから。他クラスの人が僕を知っているはずがない。

「あんな奴ら、優季の視界にいれる必要ない」

祐樹は僕の腕を掴むと無理矢理方向転換させた。教室から見えるのは、僕の背中だけ。

そのまま祐樹は走りに近いスピードで歩き始めた。

「オトモダチ、じゃないの？」

「まさか。ただの道具だよ」

煩わしいけど、時々使えるんだ。

そう言っつて、歪んだ笑みを浮かべる祐樹は綺麗だった。

くすくすくす。

二人の笑い声が共鳴する。

同じ顔、同じ呼び名。

お互いを認識するのはお互いだけでいい。

邪魔をする奴は許さないよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7516t/>

僕らの手の上に

2011年6月8日03時41分発行